The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	報道文にみられるコピュラ文の単純形と反復形
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	フランス語学研究. 2005, 39, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57759
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Japanese Society of French Linguistics

フランス語学研究，第39号，2005年，pp.15－28

報道文にみられるコピュラ文の単純形と反復形*)
Les phrases copulatives : Analyse des formes avec et sans reprise dans un corpus de journaux français

井　元　秀　剛（IMOTO, Hidetake）

A côté de la forme copulative sans reprise comme dans l'exemple *La vie est un long fleuve tranquille,* il existe une forme avec reprise comme dans *La vie, c'est un long fleuve tranquille.* Cette étude a pour but de préciser les facteurs qui déterminent le choix de la forme avec reprise dans le cadre de la théorie des Espaces Mentaux, à travers l'analyse d'exemples tirés d'un corpus de journaux français contenant à peu près 73 millions de mots. Ces analyses révèlent les trois caractéristiques suivantes : l'existence d'un paramètre pragmatique, l'assignation d'une valeur et l'intention de thématisation. Aussi, la forme « ce N est un N » essentiellement destinée aux énoncés prédicationnels, apparaît-elle peu souvent sous la forme avec reprise.

キーワード：コピュラ文(phrase copulative), 単純形(forme sans reprise), 反復形(forme avec reprise), メンタルスペース(espaces mentaux), 役割・値(rôle/valeur)

1. はじめに

フランス語には属詞を名詞句とするコピュラ文として，(1a)のような通常の形とならんで，(1b)のように，中性代名詞ceで主語を受けなおす形が存在する．ここでは(a)のような形を単純形，(b)のような形を反復形と呼ぶことにする．この二つのタイプは実際の用例ではどのように使い分けられているのか，特に反復形が用いられる意味的要因としてどのようなものがあるのかを探るのが本稿の目的である．

(1)　a.　La vie est un long fleuve tranquille.

　　b.　La vie, c'est un long fleuve tranquille.

分析にあたっては理論的装置としてメンタル・スペースを用いる．FAUCONNIER (1984)によって提起されたこの理論は特に名詞句の解釈に関して有効な手法であると思われ，筆者もすでに井元 (1991)において，中性代名詞ceが用いられる条件につ

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

いてこの理論に基づき仮説を提唱している．本研究はその延長に位置付けられるものである．以下，主語名詞句(例(1)ではla vie)をSN_1, 属詞名詞句をSN_2(例(1)ではun long fleuve tranquille)とする．そもそも反復形は再定義の形式に合致するものであり，SN_1とSN_2の間の意味的な乖離が大きければ大きいほど反復形が好まれる，ということは直感的に予想可能なことがらである．問題はその意味的乖離の内実を明らかにすることであり，そのために精緻な言語理論が必要とされるのである．

2. コーパス

分析対象コーパスとして今回とりあげたのは*Le Monde* '99, '00（約6,000万語)と*Le Monde diplomatique '84-'98 extraits* (約1,300万語)の合計約7,300万語の電子化されたテキストである．これをTextana[1] 2.52を用いて，SN_1 est SN_2 もしくはSN_1 sont SN_2で，SN_1とêtreの間に最大1語を含むことができるという条件で検索した．コピュラ文の単純形と反復形の選択に関しては，niveau de langueによる異なりがあることも予想され，文体的なファクターをできるだけ均一にするため，今回はある程度まとまった量のデータが確保できたジャーナリスムの文体に限定したものである．収集したコピュラ文の総数は約12,000例で，うち約2,600例(22%)が反復形であった．

3. 役割・値概念と中性代名詞ce

メンタル・スペース理論における「役割」「値」という基本概念にはまだ共通の了解がなく，研究者によって意味するところは微妙に異なっている．筆者の現在の定義は以下のようなものである．

(2) 名詞句のヘッドを構成する名詞，およびそれを制限修飾する語の意味を内包とするカテゴリーを役割と言い，そのカテゴリーが一定のスペースの中におかれた時，限定されるカテゴリーの要素を値と言う

(井元 2004:2)

簡単に言えばカテゴリー(役割)と成員(値)の関係であり，この関係は自然言語の基本的な構造を規定しているものであろう．我々は認識すべき現実の混沌とした対象を，ある種の類似性に着目して分類し，名づけることで外界理解の基調としているのである．名詞句はこのカテゴリー構造を本質的に備えていると考えられる．よく用いられる例はprésidentという役割がChiracという値を持つという関係であるが，このprésidentも地域や時代を限定しなければMitterrand, Chirac, Bushなどを要素とするカテゴリーで，Chiracはこのカテゴリーが現代のフランスというスペースにおかれた時の唯一の要素である．présidentのような名詞句の場合，スペースに関する言語外知識を社会的に共有していてその知識によって値が特定されるのだが，garçonのような普通名詞は，文脈ごとに個別に提供されるスペースに関する情報に

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

よって値の特定が行われる．le garçonという定名詞句の形は，問題となっているスペースにおいて，garçonのカテゴリーに属する要素が特定のものに定まるということを示しており，そのような形で特定化された要素が値であり，値はこの意味においてしばしば名詞句の指示対象として機能するのである．

井元 (1991)ではさらに，役割と値の双方を備えていると解釈される名詞句を「十全な名詞句」，役割もしくは値を欠いていると解釈できる名詞句は「不完全な名詞句」と定義し，中性代名詞ceに関して以下の仮説を提示した．

(3) 中性代名詞ceは先行詞の役割もしくは値のみを受ける不完全な名詞句として文中で機能する．

名詞句は通常，指示対象を備えているものであり，その指示対象が値で，その値を指示するのに用いられた名詞のカテゴリーそのものが役割であるから，ほとんどの場合は十全な名詞句としてふるまう．しかし役割と値の関係そのものを問題とするようなメタ言語的な言説があり，その場合に不完全な名詞句が補完的に用いられる．その典型的な例がコピュラ文である．

(4) En France, le chef de l'Etat c'est le président, et le président c'est Mitterrand. (FAUCONNIER 1991:186)

(4)はフランスというスペースにおいて，chef de l'Etatという役割がprésidentという値を持ち，présidentという役割が，ここで文脈上デフォルトで与えられている(フランスの)1991年当時のスペースではMitterrandという値を持つことを述べている文である．ceはこのそれぞれの先行詞の役割だけを受けているのである．(4)は同じprésidentという名詞がchef de l'Etatに対しては値，Mitterrandに対しては役割になっており，役割/値が相対的な概念であることも示している．

不完全な名詞句には，(4)のように役割だけを受けるものと，次の例のように値だけを受けるタイプの二つが存在する．

(5) Orphée -- [...] Comment se comporte le garçon ?
Eurydice -- Orphée, *c*'est peut-être une fille.
(Jean Cocteau, *Orphée*)

(5)の場合，まだ生まれる前の子供のことを問題にしており，Orphéeがそれをle garçonという役割で導入したのに対し，Eurydiceはその役割を受け継ぐことを拒否し，指示対象である値だけをceで受けたものと考えられる．同様の例として

(6) Tiens, prends ce stylo. Ce sera le tien.(BURSTON & BURSTON 1981:231)

をあげることもできるだろう．(6)はアイデンティティが確立している名詞句に対してもceを用いる例としてKleiber (1984)でも引かれているものである．確かに先行詞のce styloは十全な名詞句である．しかしそれだけならば(5)の先行詞のle garçonも同様である．問題はそれを受けなおした中性代名詞のceの価値である．この場合指示対象を一般的なstyloではなくて，ton styloという個別のカテゴリーに再

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

分類しようとするものであり，そういった再分類のための方略として問題となっている名詞句の値のみをとりあげるceが用いられたものと考えるのである．

以上をまとめるとceが使用される反復形には

(7) a. ceが役割だけをうけるタイプ (4)

b. ceが値だけをうけるタイプ (5)(6)

の二つが存在することになる．(3)(7)は井元 (1991)で主張した内容であり，本稿の趣旨はこの仮説を検証することではなく，この仮説を前提とした上で，実際の用例がどのように分布しているかをみるものである．

4. コピュラ文の意味論的分類

コピュラ文の分類としてはDECLERCK (1988), 西山 (2003)などの先行研究がある．ここでは西山 (2003)の分類を基本的に踏襲することにする．

4.1. 措定文

主語にアイデンティティの確立した十全な名詞句が来，その属性を属詞で付与する典型的なコピュラ文である．属詞は(8a)のように形容詞のこともあれば，(8b)のように名詞句のこともある．

(8) a. Ce directeur est très sévère.

b. Ce directeur est un homme d'affaires très sévère.

これはメンタルスペース理論で記述文と呼ばれてきたものである[2]．主語は十全な名詞句であるから，受けなおす場合，ceではなくilを用いるのが原則で，(8a)で主語を左方転移すると Ce directeur, il est très sévère.となる．従って本稿の対象からはずれるが，(8a)と内容的に変わらない(8b)の場合

(9) Ce directeur, c' est un homme d'affaires très sévère.

のようにceを用いて左方転移しなくてはならない．この(9)は後述するが，措定文(8b)の反復形ではなく，(6)と同様の同定文に変質していると筆者はみなしている．

4.2. 指定文

主語に役割がきて，属詞として値を指定する文である．前述した(4)がこれにあたり，(7a)のタイプを構築する．

(10) a. Le directeur de notre école est M. Martin.

b. Le directeur de notre école, c'est M. Martin.

日本語でこの基本形(10a)に相当するのは(11a)であり，西山 (2003)では倒置指定文と呼んでいる．

(11) a. わが校の校長はマルタン氏です

b. わが校の校長はマルタン氏がです

c. マルタン氏がわが校の校長です

これは上林 (1988)の用語法を踏襲したためであり，そこに(11a)は(b)のように「が」

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

という助詞を指定する値の後におけることから，(c)のパターンを基本形として，これを「指定文」，(a)のパターンをその派生形で「倒置指定文」と呼ぶという議論がある．ところが，指定文の場合，値を欠いた役割は「何かがその役割を満たす値である」ということが前提となっている旧情報を構築するものであり，英仏語では(10a)のように文頭に置かれるのが原則である．仮に(10a)の主語と属詞をいれかえて

(12) M. Martin est le directeur de notre école.

とすると，属詞は新情報をになうと解釈され，これは(11c)に相当する指定文ではなく，「マルタン氏は本校の校長です」という措定文の解釈を受けるだろう．(11c)に相当するフランス語は

(13) C'est M. Martin qui est le directeur de notre école.

という強調構文であるが，これは(10a)から派生したもので，(13)を(10a)の基本形とするわけにはいかないだろう．日本語の場合も，筆者は(11b)の形は自然ではなく，これは(c)の「わが校の校長」の部分を主題化してできた文であって，(a)の背後にある構造を示唆するものとは捉えない．英語を扱ったDeclerck (1988)も(10a)の形を基本形としてspecificational sentenceと呼んでいるので，指定文という名称がふさわしいと考える．

4.3. 同定文

メンタルスペース理論では，同定文という用語を，措定文のような属性を問題とする記述文に対してアイデンティティを問題にする文全体を指すのに用いられ，基本的に指定文を意味する名称であったが[3]，ここでは西山 (2003)同様，より狭義で用いることにする．これはM. Martinがどのような人物かわからないというときに，M. Martinの値に対して役割を付与する文で，(7b)のタイプを構築するものである．上述したように(5)(6)はこれに相当する．

(14) a. M. Martin, c'est le directeur de notre école.

b. M. Martin, c'est un linguiste français.

反復形は(14)のようにceを用い，SN_2は定になることも不定になることもある．

ところが(14a)の単純形は(12)で，通常は措定文としての解釈が自然である．逆に言えば(12)は形の上では措定文としても同定文としても解釈できる，ということであり，実際措定文と同定文を形式で区別するのは難しい．両者の違いはSN_1のアイデンティティーを問題にするか否か，SN_2が定義的属性を示すか否か，であるが，これは話し手の捉え方によって自由に変化する余地を持つ．SN_1のアイデンティティがすでに確立している場合でも，改めてそれを問題とし，SN_1とはこのようなものなのだ，と修辞的に定義しなおすことは極めて頻繁におこりうる．例えば，

(15) Paul est un garçon très gentil.

は措定文としての解釈が自然だが，Paulという人物を良く知らない，また全く知ら

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

ない聞き手に対してPaulはこのような人物なのだと説明する同定文と解釈できないこともない．(15)の反復形である

(16) Paul, c'est un garçon très gentil.

は，措定文と解釈される(15)の反復形なのではなく，同定文と解釈した場合の反復形なのである．これはceで受けなおすことでPaulの値のみを受け，再カテゴリー化をはかっている(6)のような(7b)タイプのものと筆者はみなしたい．措定文としての性質を保持した(12)(15)の反復形はilで，主語代名詞を受けなおした

(17) a. M. Martin, il est le directeur de notre école.

b. Paul, il est un garçon très gentil.

でなくてはいけないのである．ただし，(17)のように個体をトピックとしてとりあげ，それを人称代名詞ilで受けなおしたコピュラ文は実例としては検索されなかった．

この同定文の変種としてSN_1に総称名詞句がくるものを定義文と呼ぶ[4]．

(18) *Un virus est un programme* non désiré, capable de se reproduire, et souvent nuisible. (*Le Monde,* 24 mai 2000, p. 6)

のようなものがそうだが，SN_1には定名詞句が来るものも多い．SN_1が総称名詞句の場合の措定文と定義文の間に実質的な違いを見出すことはむずかしい．措定文と定義文の意味的違いは，SN_2が定義的属性をになっているか否か，ということであるが，総称文の場合辞書的定義やありきたりの属性を述べることはむしろまれで，比ゆ的な拡張をともなうのが普通である．冒頭にあげた(1)の例がこれで，(1a)が措定文，(1b)が定義文であるが，この(a)と(b)は同じ文の単純形と反復形という対応関係になっている．実際現実に現れた用例についてSN_1とSN_2の意味的乖離の度合いをみても，措定文よりceを用いた再定義文の方が大きそうだという印象は残るが，(1)のvieとfleuveの間に語彙レベルでは何の関係もないから，このような比較はほとんど意味をなさないと思われる．主題化意図の度合いにしても文脈上明らかにそれと感じられるほどの差はなく，反復形が用いられているので結果として主題化意図が感じられるという程度である．つまり，この構文においては話し手，書き手の選択の自由度が最も高く，その表現意図に応じて単純形と反復形が使い分けられるということになる．

5. 反復形の要因とコピュラ文の形式

前章の議論から，反復形は4.2で述べた指定文と4.3で述べた同定文に限られることになるが，そのそれぞれについて，反復形の要因という観点から形式的な特徴を実例に則して明らかにしていきたい．

5.1. 語用論的コネクターの存在

分類としては指定文であるが，他の指定文と別に扱いたい反復形の形式がある．

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

SN_1, SN_2がともに固有名となる場合で，全体では36例，うち12例(33.3%)が反復形であった．この形式のコピュラ文としては

(19) Dr. Jekyll is Mr. Hyde. (DECLERCK 1988:110)

のような同一性文とよばれる特殊な文も想定しえるが，現実にある用例は

(20) Elisabeth Taylor, c'est Cléopâtre. (FAUCONNIER 1991:182)

のように二つのスペース((20)の場合は現実スペースとドラマスペース)が構築され，その要素間の対応関係を示すものばかりである．このときこの二つのスペースを結びつける関数をコネクターと呼ぶ．代表的なコネクターは映画，演劇，オペラなどで俳優と役とを結びつけるドラマコネクターである．実際上記36例のうち20例はドラマコネクターの例で，俳優をSN_1とし，役をSN_2とする(21)のような場合もあれば，逆に役をSN_1におく(22)のような場合もある．

(21) *Miriam Gauci est Elisabeth de Valois.* La voix a un vibrato un peu lâche, mais elle est soutenue par une vraie ligne de chant et les aigus se développent avec une richesse de timbre magnifique.
(*Le Monde,* 3 juillet 1999, p. 29)

(22) Romance conte l'itinéraire moral de Marie. *Marie est Caroline Ducey,* qui porte le film, incarnant un personnage pourtant très éloigné d'elle. (*Le Monde,* 15 avril 1999, p. 31)

ただし，ドラマコネクターの場合，20例のうち19例は単純形で生じており，(20)のような反復形は以下の(23)一例しか存在しない．

(23) Belle maman, c'est Catherine Deneuve.
(*Le Monde,* 11 mars 1999, p. 29)

これは "Belle maman" という映画のタイトルが示され，その映画評の冒頭の一文である．またBelle mamanはタイトルロールではあるが，厳密な意味での固有名詞ではない．この例は強い主題化意図と，修辞性の強い特殊な例と言うことができよう．

このケースにおける反復形の使用はコネクターの種類による．ドラマコネクターは一般的知識の中に組み込まれており，語彙的な役割・値関係に準じて考えることができるだろう．これに対し通常の語用論的コネクター(代表的なものは類似性に基づくイメージコネクター)は話し手の個人的判断で二つの領域の間に対応関係を設定するものである．以下の例はその代表的なものである．

(24) Poussés sur la défensive par ce torrent de critiques des europhobes qui se sentent confortés dans leur opposition à l'euro, les médias pro-européens s'efforcent toutefois de tirer quelque réconfort de cette crise. A commencer par le Guardian (centre gauche) qui évoque, à propos de la défaillance de l'exécutif européen, la chute de l'Ancien

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

Régime en 1789. *"Jacques Santer, c'est Louis XVI, Edith Cresson Marie-Antoinette, le Parlement européen, les Etats généraux et la presse représente la version moderne de la guillotine."* On connaît la suite. (*Le Monde,* 19 mars 1999, p. 34)

(24)は類似性に基づいて1999年当時の政治状況と革命期の政治状況とを対応付けている．このコネクターの存在が反復形の動機である．

(25) Bruno Boëglin, c'est Pinocchio, et Pinocchio, Bruno Boëglin.
(*Le Monde,* 14 avril 1999, p. 31)

(25)におけるBoëglinは演出家の名前で，Pinocchioは彼がてがけた劇の名前である．この場合Boëglinといえば，Pinocchio, PinocchioといえばBoëglinというように，演出家とその作品を結びつけるようなコネクターが介在している．この場合コネクターの種類は(24)と異なるものの，コネクターの介在が反復形の動機になっていると言う点は認めてよいと思われる．

このような語用論的コネクターを介して固有名と固有名を結ぶケースの場合，ceはSN_1が対応するものという役割をうけ，SN_2でその値を指定する指定文の構造を有していると考えられる．

SN_2が固有名以外の場合，単純形は措定文もしくは同定文，反復形は同定文というように分析されるが，その用例をみてみても，語用論的コネクターが介在している場合は反復形，そうでない場合には単純形となるのが普通である．

(26) Olivier, mon personnage, est un homme de théâtre, un homme qui parle. *Vincent, c'est le cinéma,* c'est quelqu'un qui écoute, qui écoute par l'intermédiaire d'une machine.
(*Le Monde,* 13 décembre 2000, p. 31)

人はcinémaというカテゴリーには本質的に属さないから，(26)はVincentとVincentが体現するものというような対象が語用論的コネクタターで結ばれているとみてよい．このコネクターの存在が反復形を選択させ，このようなコネクターを介さないOlivierの場合は単純形で表現されていることが観察される．

以上のような観察から次のような主張ができると思われる．

(27) 個体が語用論的コネクターで別の対象と結び付けられ，その対象がコピュラ文による述定を受ける場合コピュラ文は反復形で表現される．

代名詞ilとceの選択に関してではあるが，三藤(1989)にも同様の指摘が見られる．

5.2. 指定文

語用論的コネクターによらない指定文の代表的な形式はSN_1がle Nのものによって与えられるが，主語のle Nが役割解釈されるかいなかはNの意味内容によっている．Le problème, le premierなどはほぼすべて指定文であるが，le résultatの場合

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

は結果が何であるかではなく，結果についてコメントするという措定文のものも見られた．

(28) C'est la cité qui fabrique les délinquants. *Le problème, c'est le chômage.* Les jeunes restent à galérer ici et n'ont plus que la haine.

(*Le Monde,* 30 janvier 1999, p. 11)

反復形の要因としては，指定文の場合，主題化の意図が高いほど反復形になりやすい，という現象が観察される．Le problèmeを主語とする指定文をみてみると，35例のうち30例(85.7%)が反復形である．問題が何であるかを明記することは改めて取り立てて主題化するに十分値する内容であるので，この主題化の意図が選択に関係していると思われる．これに対し，同じようにもっぱら役割解釈をうけるle premierはle deuxime, le troixième,..などと並列的に用いられるという含意があるため，特立される必要性は少ない．実際全152例のうち反復形は25(16.4%)である．

さらに，数は少ないがce N主語によって役割が示される指定文も存在する．SN_1がce N, SN_2が固有名の例は4例あったが，すべて指定文でしかも反復形である．

(29) Qui a vécu en Andalousie, disent des poètes, ne pourra jamais aller en enfer, parce qu'il a connu le paradis sur terre. *Ce paradis c'est Cordoue,* dont la grandeur et la richesse, sous l'autorité du calife omeyade, en firent la rivale de la Bagdad abasside.

(*Le Monde,* 26 juin 2000, p. 29)

SN_2がle Nとなる用例も1例あった．

(30) A répéter sans cesse : "Les juges doivent être indépendants", on ne risque guère d'être contredit. Pourtant, contrairement à ce que vient d'affirmer le premier ministre, que l'on a connu sinon mieux inspiré, du moins mieux informé, l'indépendance de la justice, ou plus précisément des juges, doit bel et bien souffrir une exception : *cette exception, c'est le respect de la loi.* (*Le Monde,* 10 juin 1999, p. 17)

この用例の場合も反復形である．これも主題化意図によって説明できると思う．SN_1としてce Nの形式で役割をとりあげたということは，その役割を認知的に突出したものとして捉えることであり，主題化意図につながるものである．Ce N主語の指定文の用例は(30)を含めて5例のみだが，そのいずれの場合も反復形が用いられていることは特筆に価する．

面白いことに指定文の反復形の場合，SN_2はほとんど定のものに限られる．指定文自体は，

(31) Sam Shaw appartient à la seconde catégorie, pour deux images célèbres du cinéma : *la première est un portrait de Marlon Brando, en 1951...* (*Le Monde,* 21 avril 1999, p. 15)

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

のようにSN_2に不定名詞句が来たところで何の問題もないが，反復形が使われたものはle premierが主語でSN_2が不定名詞をとる全90例のうちわずか(32)の1例(1.1%)しかなかった．Le problème主語のものやce N主語の指定文の反復形にSN_2が不定のものは1例も見られない．

(32) Je ne me suis livré dans mes déclarations à aucune attaque personnelle et à aucune polémique. Dans cette affaire, il y a deux écueils à éviter. *Le premier c'est une décision à la va-vite en deux mois sur un seul projet.* (*Le Monde,* 25 août 1999, p. 13)

(32)はインタビュー記事の中で生じたものであり，会話体であることが関係しているのかもしれない．なぜ，指定文の反復形でSN_2に定のものが好まれるのかという理由は不明である．わざわざ役割を主題化してとりあげ値を指定する場合には，あらかじめ値の候補となるべきリストが潜在的にあって，そこから特定のものを指定することになりやすい，ということであろうか．

以上のような観察からコネクターの介在しない指定文については以下のようにまとめられるだろう．

(33) SN_1を役割解釈する指定文の場合，SN_2が定名詞句で，SN_1に対して主題化意図が加わった時反復形が用いられる．

5.3. 同定文

SN_1が個体を表すものと，SN_1が総称名詞句を表し定義文となるものとで異なる．

5.3.1. SN_1が個体の場合

本研究ではle N主語として1語のものしか取り上げていないので[5]，個体を導入するSN_1としてはce Nのものと固有名のものしか検索されなかった．しかし，個体性の強いこれらの名詞句は十全な名詞句として指示対象を提示するのが普通で，今回検索されたコピュラ文で同定文と解釈されるものは極めて少なかった．Ce N主語のほとんどは(34)のように措定文である．

(34) a. Ce livre est un guide précieux.
b. Ce livre est le résultat d'une recherche menée par des sociologues.

そもそも単純形では4.3で述べたように同定文と措定文との区別は純粋に解釈上の問題であって，厳密に区別することは難しい．固有名が出てきて，その紹介を行う以下のような文は，措定文ではなく同定文に分類した方がよいと思われるが，微妙な解釈がからむのでどの位の実例があるのか正確には把握しきれていない．

(35) Ralph Fiennes et Julianne Moore étaient faits l'un pour l'autre. *Fiennes est un maître du double jeu.* (*Le Monde,* 5 avril 2000, p. 27)

一方反復形の場合，形の上からも同定文としての解釈をサポートするが，実例が極めて少ない．固有名の判定には解釈の余地がからむので，SN_1としてce Nが用い

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

られた場合でみてみると，措定文，指定文を含めたce N主語のコピュラ文の分布は以下の表のようになる．

SN1	SN2	総数	反復形	反復形の割合
ce N	un N	140	3	2.1 %
ce N	le N	137	12	8.1 %
ce N	Npr	4	4	100 %

Tab. 1

この表に現れた反復形のうち，SN_2がle Nのものの1例と固有名の4例すべては5.2であげた指定文である．従がってその５例を除いた14例のみが，今回検索された反復形の同定文ということになる．

この14例のうち，SN_2にun Nが来たものとle Nがきたものの二つを以下にあげるが，どの場合も極めて強い主題化意図が感じられる．

(36) Faut pas croire que c'était une partie de rigolade, là-haut. On n'avait pas les chambres à gaz, mais c'était quand même les camps de la mort ! *Ce procès, c'est une manière de leur faire reconnaître le passé...* "

(*Le Monde,* 19 septembre 2000, p. 12)

(37) Toute l'œuvre de Dali a sublimé le paysage de Port-Lligat: [..この間この土地に関する記述が続く..] *Cet endroit, c'est l'espace de ses premières expériences picturales, espace qu'il cherchera à forcer, à tromper, à dépasser, à faire éclater en mille techniques insoupçonnées pour briser la surface plane de son oeuvre* [...]

(*Le Monde diplomatique,* Juillet 1984, p. 23)

SN_1が固有名のものも同様である．

(38) *Saint-Jean-Cap-Ferrat. C'est l'un des sites de prédilection des meilleurs spécialistes de l'apnée.* Loïc Leferme, le nouveau détenteur du record "no limits", animera deux sessions pour tous niveaux.

(*Le Monde,* 14 juillet 2000, p. 23)

これは一種の宣伝であり，特別に話題としてとりあげる主題化意図が明白である．また

(39) *Bourguiba, "c'est le grand homme",* lance-t-elle, la voix pleine d'émotion. (*Le Monde,* 23 octobre 1999, p. 14)

においてBourguibaというのは大統領の名前だが，これは大統領に対する住民の感慨のせりふを記述したもので，ここでも高い主題化意図を読み取ることができる．

つまり，通常十全な名詞句と認識されやすい個体主語の文の同定文は，その対象

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

をこと新たにとりあげ，再定義するような文で生じやすいということであろう．未知の対象を単純に同定するような同定文は，今回とりあげたような即時反復の形ではなく，(5)(6)のように文脈既出の要素を前方照応するC'est SN_2もしくはCe sont SN_2のような形式で与えられるのではないかと思われる．

5.3.2. 定義文

SN_1として総称名詞句をとる定義文は用例が極めて多い．定義文の形式はle Nもしくはun N主語の形で生じる．このケースの単純形で措定文と定義文を区別することは難しく，形の上から(1a)のようなle N総称文は措定文，(1b)のような反復形は定義文，un N総称文は単純形も反復形も定義文と断定したところでそれほど問題があるようには思えない．Le N主語，un N主語のコピュラ文の分布は以下のとおりである．

SN_1	SN_2	総数	反復形	反復形の割合
Le N_1	Le N_2	5721	1843	32.2%
Le N_1	Un N_2	5904	746	12.6%
Un N_1	Le N_2	27	12	44.4%
Un N_1	Un N_2	130	51	39.2%

Tab. 2

この表の中にはle N主語に関して5.2で述べた指定文，un Nに関して後述する中立叙述のケースが含まれるが，ほとんどは総称文である．

実例を見て見ると，

(40) *La paix, c'est un équilibre* entre des forces extrêmes, mais ça nécessite également beaucoup de force. (*Le Monde,* 15 mars 1999, p. 25)

のような定義文と(1a)のような措定文の違いを見出すことは難しい．Un N総称文の場合もSN_1に単純形と反復形で同じ名詞の用例がみられる．

(41) Jean-Luc Godard compare ce genre de travail à celui des ébénistes, des artisans. - Un film, c'est exactement cela. Quand on retourne au travail, on sait se servir de ses outils. *Un film est un enchaînement d'opérations,* il faut l'écrire, le tourner, le monter, mettre la musique... (*Le Monde,* 28 janvier 1999, p. 29)

(42) Il faut tout montrer, à partir du moment où on a la permission. Ce qui est bon, mauvais, banal, comique, triste, sauvage, tragique. *Un film, c'est un voyage.* Mais j'ai une responsabilité envers les gens qui me donnent l'autorisation de regarder leur vie, et je prends cette responsabilité très au sérieux. (*Le Monde,* 17 novembre 1999, p. 32)

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

(43) *Un virus est un programme* non désiré, capable de se reproduire, et souvent nuisible. (*Le Monde,* 24 mai 2000, p. 6)

(44) *Un virus, c'est un programme* qui peut en infecter d'autres en les modifiant de manière à y inclure une copie de lui-même. Il n'est donc, au départ, aucunement question de destruction. D'ailleurs 70 % des virus sont inoffensifs (*Le Monde,* 10 mars 1999, p. 2)

ただ，不定名詞句は主語になりにくいという談話上の制約があるのでun N総称文の総数はle Nに比べて少ない．しかし総称文としての解釈がもっとも一般的である点は同じである．ただ反復形が使用される割合は，主語としての安定性がle Nより劣るためか，un Nの方が多い．

主題化意図に関しても5.3.1の場合と異なり，単純形と反復形の間に目立った差は感じられないから，総称文は4.3で述べたように，話し手，書き手の選択の自由度が最も高く，その表現意図に応じて単純形と反復形が使い分けられるということになるだろう．

以上のような観察から同定文に関しては以下のようにまとめられるように思う．

(45) SN_1が個体を指示する場合，単純形を用いる措定文の形式が一般的で反復形は生じにくく，同定文として生じる場合は極めて強い主題化意図が感じられる．これに対し，SN_1が総称名詞句の場合は単純形と反復形の間に違いはみられず，話し手の表現意図に応じて自由に選択されている．

5.4. 反復形があわられにくい形式

これまで述べてきたように，措定文はそのままの形式では反復形になることはできないので，ce N主語のように措定文が一般的な形式では対応する同定文の反復形も現れにくい．また，SN_1がun N，SN_2がle Nとなるものの中で中立叙述と呼ばれる反復形を持たないコピュラ文が存在する．

(46) *Un musicien est l'objet d'un chantage* à la suite de l'assassinat de sa maîtresse d'un soir. Une adaptation sans relief d'un roman de James Hadley Chase. (*Le Monde,* 2 octobre 2000, p. 36)

中立叙述文は意味内容は措定文と同じだが，措定文があらかじめ主語の存在を前提とし，それについて何かを述べるという二重判断の構造を有しているのに対し，「主語が～である」という命題全体を新情報として提示する単一判断という判断の構造を有してる点が異なる．日本語では中立叙述の「が」と呼ばれる格助詞「が」で主語がマークされる．(46)の場合も「一人の音楽家がゆすりの対象となる」という日本語に対応するであろう．反復形は二重判断の文を構築するので，中立叙述の反復形は存在しない．

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of French Linguistics

6. 結論

コピュラ文において反復形が好まれる要因には，語用論的コネクターの存在，指定文の形式，同定文による再定義といった複数のものが考えられ，決して一様ではない．反復形は主題化構文の一種であり，その選択は主題化意図と密接に関係するが，文のタイプによってはこの意図をそれほど必要としないものも存在する．また定義文のように話し手の自由度が高く予測可能性を排除する文も存在するが，文のタイプによっては(27)(33)のようにある程度反復形の出現を予測することも可能である．

（大阪大学）

[注]

*) 本稿は2004年5月25日に行われた第216回フランス語学会例会で発表した内容をまとめたものである．発表の際貴重なコメントを下さった方々に感謝したい．

1) 赤瀬川史朗氏が製作したコーパス、言語分析ソフト．

2) 坂原 (1990)参照．

3) 坂原 (1990)参照．

4) 以下、用例のイタリックは特に断らない限り筆者による．

5) le livre de Paulやle livre qu'il a achetéなどは検索されない．

[参考文献]

BURSTON, J. & M. MONVILLE-BURSTON (1981), "The Use of Demonstrative and Personal Pronouns as Anaphoric Subjects of the Verbe ETRE", *Linguisticae Investigationes,* 5- 2, 231-257.

DECLERCK, R. (1988), *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefs,* Leuven University Press.

FAUCONNIER, G. (1984), *Espaces mentaux,* Les Editions de Minuit.

FAUCONNIER, G. (1991), "Roles and Values: The case of French copula constructions", C. Georgopoulos & R. Ishihara (eds.) *Interdisciplinary Approaches to Language: Essays in Honor of S.-Y. Kuroda,* Kluwer Academic Publishers, 181-206.

井元秀剛 (1991) 「人称代名詞ILの指示対象ー主にCEとの対比において」『仏語仏文学研究 (東京大学仏語仏文学研究会)』7, 117-141.

井元秀剛 (2004) 「スペースと名詞句解釈」『言語文化共同研究プロジェクト2003 言語における時空をめぐってII』大阪大学, 1-12.

上林洋二 (1988) 「措定文と指定文ーーハとガの一面」『筑波大学文芸・言語学系紀要　文藝言語学研究　言語篇』14, 57-74.

KLEIBER, G. (1984), "Sur la sémantique des descriptions démonstratives", *Linguisticae Investigationes,* 8-1, 63-85.

三藤博 (1989) 「フランス語におけるc'est/il est, ce N/le N の対比について (情報の帰属領域の理論に向けて)」『フランス語学研究』23, 60-67.

西山祐司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 ー指示的名詞句と非指示的名詞句ー』ひつじ書房.

坂原茂 (1990) 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」『認知科学の発展』3　講談社, 29-66.

NII-Electronic Library Service